

第1分科会 国語教育（言語活動と言語の教育）

生き生き学び、読む力を育てる国語科指導

1. 設定理由

「国語って楽しいな！」「もっとやりたい！」「できるようになったよ！」と多くの児童が感じることができたら、児童にとって幸せなことだろう。国語は1年生から毎日学習している。他教科にもつながる、生きていく力になる大事な教科である。国語の力をつけることができれば児童は自信を持つことができ、様々なことへの意欲につながるのではなか。

しかし、現実には「次の時間は国語かあ・・・。」という声が聞こえてくることがある。「国語大好き！！」「次の国語も楽しみ！」という声を聞くことは残念ながらほとんどない。

国語が楽しいと感じる理由の一つに、「自分の考えを伝えることができた時」があがる。相手に自分の考えを伝えるには、自分の意見を持たなくてはならない。そのためには、文や資料等から必要な情報を読み取る読む力が大切である。読む力は学習において大切な力である。

そこで、読む力をつけて児童が自信を持って意欲的に学習できるように、本研究主題を設定した。

2. 研究仮説

児童に身につけたい力に合った言語活動を設定し、児童に毎時間目的意識を持たせて学習させることができれば、主体的に学習ができるのではないか。また、必要に応じて対話的活動を取り入れることで、児童の思考を深めることができるのではないか。これらの積み重ねが読む力を育てると考えた。

3. 研究内容

- ・言語活動を通して、読む力をつける授業実践。
- ・次期学習指導要領を見据えた学習を目指す。

4. 結論

- 目的意識を持たせ、対話を効果的に取り入れれば、児童は主体的に学び、読む力もつくと考え。
- 対話活動の効果的な取り入れ方を考え、読む力をつけていく授業を日々考えていく必要がある。

1. 研究主題

生き生き学び、読む力を育てる国語科指導

2. 主題設定の理由

「国語って楽しいな!」「もっとやりたい!」「できるようになったよ!」と多くの児童が感じることができたら、児童にとって幸せなことだろう。国語は1年生から毎日学習している。他教科にもつながる、生きていく力になる大事な教科である。国語の力をつけることができれば、児童は自信を持つことができ、様々なことへの意欲につながるのではないかな。

しかし、現実には「次の時間は国語かぁ・・・。」という声が聞こえてくることがある。「国語大好き!!」「次の国語も楽しみ!」という声を聞くことは残念ながらほとんどない。

本学級の児童は、アンケートの結果、国語が「楽しい」と答えた児童は45%で、算数の66%よりも劣る（アンケートは「楽しい」「どちらかというとなじしい」「どちらかというとなじしい」「楽しくない」の4択）。理由は様々ではあるが、根本的な理由は「興味を持てない」「わからない」「できない」からだろう。

国語が楽しいと感じる理由の一つに、「自分の考えを伝えることができた時」があがる。相手に自分の意見を伝えるには、自分の考えを持たなくてはならない。そのためには、文や資料等から必要な情報を読み取る読む力が大切である。読む力は学習において大切な力である。

そこで、読む力をつけて児童が自信を持って意欲的に学習できるように、本研究主題を設定した。

3. 研究仮説

児童に身に着けたい力に合った言語活動を設定し、児童に毎時間目的意識を持たせて学習させる。必要に応じて対話的活動を取り入れることで、児童の思考を深めるのではないかな。これらの積み重ねが読む力を育てるのではないかな。

4. 仮説検証の手立て

3年生の教材「モチモチの木」(斉藤隆介作)を使い、検証授業を実施する。

「モチモチの木宝箱を作ろう！」

- ① 身につけさせたい力をはっきりさせ、言語活動を決定する。
- ② 対話的な活動を効果的に取り入れる。
- ③ 毎時間「宝箱作り」を通して読む力を育てる授業の工夫

① 身につけさせたい力をはっきりさせ、言語活動を決定する。

教材の特長を把握し、指導要領に基づき身につけさせたい力を決める。

「モチモチの木」を通して主に身につけさせたい力は、

学習指導要領 第3学及び第4学年「C 読むこと」

- (1) ウ **場面の移り変わりに注意しながら**、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと。

オ 文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気付くこと。

次期学習指導要領 第3学年及び第4学年「C 読むこと」

- (1) 精査・解釈

エ 登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、**場面の移り変わり**と結びつけて具体的に想像すること。

共有

文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くこと。

である。よって、場面の移り変わりから人物の心情の変化を読み取らせたい。また、場面と場面を結びつけて人物の紹介を行う活動を取り入れる。

これを基に・・・

言語活動の決定

モチモチの木の話の良さを紹介することを目的にする。

「モチモチの木宝箱」を作って、お話の良さを紹介しよう！

「モチモチの木宝箱」とは…

一人一人が感じたこと、学んだことがつまった、お話紹介宝箱。

※箱の特性を生かす。場面の移り変わりがわかるように、側面に場面の絵を貼り、くるくる回せるようにする。

側面

場面の紹介と、それに伴う豆太の変化がわかる。

上ぶた

題名・作者名・自分の名前

中身①

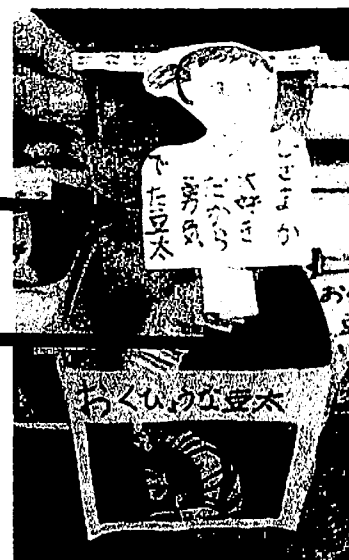
飛び出す豆太「豆太ってこんな人」

中身②

巻き物「お気に入りの場面紹介」

中ぶた

お気に入りの場面の挿絵

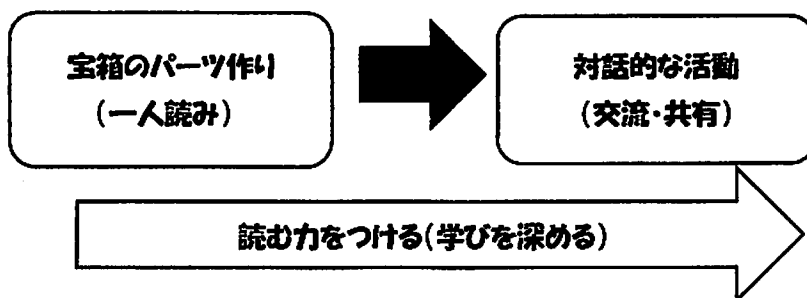


「モチモチの木と」とは。

5歳の豆太が主人公の話だ。甘えん坊で臆病者の豆太が、大好きなじさまのために一人で夜中の峠を下り医者様を呼びに行く。豆太のじさまを思う優しい気持ちにより勇気を出した豆太は、山の神様の祭りを見る。モチモチの木に灯がついたところを見たのだ。それは、勇気を出した者しか見ることができないのである。しかし、じさまが元気になると豆太はもとの甘えん坊の豆太に戻ってしまう。

注意すること

学習の目的は「モチモチの木宝箱」を作ることではない。毎時間、少しずつ宝箱を作りながら学習を進め、宝箱を作ることを通して、読む力を育てていく。



② 対話活動を取り入れる。

全児童が、学びの主役である。そのためには、対話的な活動を効果的に仕組んでいく。

対話の目的

- ・ 簡単な内容を話すことで、対話への抵抗をなくす。学びへのスイッチを入れる。
- ・ 自分の考えを他者に話すことで、自分の考えが整理される。
- ・ 他者の考えを聞くことで、一人では気づかなかったことが知れて学びが広がる。
また、自分の考えが深まる。(考えの質の変容)
- ・ 一人一人の考えに違いがあることに気付く。

※また、対話を通して、自分の考えを他者にわかってもらえた喜びを感じ、安心して学ぶことができると思う。

対話の仕方

- ・ ペア活動とする。理由は、できるだけ多くの児童と対話をしてほしいからである。グループでの対話も考えたが、児童の実態として対話に参加できない児童もいるため、毎回、自分でペアを探し、対話が終わったらどんどん次のペアを見つけていく。

③ 毎時間「宝箱作り」を通して、読む力を育てる授業の工夫

単元計画 (全7時間)

第一次

- ① 斉藤隆介さんのお話に興味を持つ。

第二次

- ① 話の流れと人物の内容をつかむ。
- ② 豆太の変化を宝箱を作って紹介しよう。
- ③ みんなの考えを聞き合おう。
- ④ 豆太を一言で表すと？
- ⑤ ⑥お気に入りの場面を紹介しよう。(2時間)

第一次 1時間目

【ねらい】 モチモチの木を読む前に、斉藤隆介さんの本を読むことを通していろいろな話があることを知り、興味を持つ。

学習内容	指導の手立て ★評価
① 教師の「お話宝箱」の紹介を聞き、その本の読み聞かせを受ける。	・ 斉藤隆介さんの「花さき山」で作成した教師の「紹介宝箱」を見せることで、学習のイメージをわかせる目的意識を持たせる。
② 斉藤隆介さんがたくさん本を書いている	

ることを知り、実際に読んでみる。	・興味を持てない児童には、教師が読み聞かせをする。 ★斉藤隆介さんの本に興味を持って読んでいるか。 【関心・意欲・態度】
-------------------------	---



※次時の「モチモチの木」の学習時に、普段の物語の学習の時よりも「気になる！」と話を楽しみにしている児童がいた。

第二次 1時間目

【ねらい】登場人物をおさえ、相関図を書くことを通して大まかなあらすじをつかむことができる。

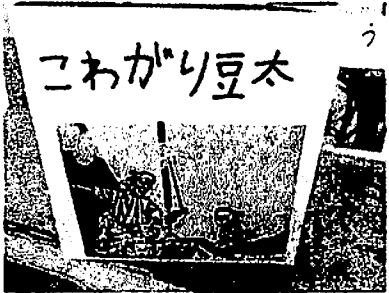
学習内容	指導の手立て ★評価
① 「モチモチの木」の教師の範読を聞く。 ② 登場人物の確認をする。 ・豆太 ・じさま ・医者様 ③相関図を書き、隣りの人と見合う。 ・豆太とじさまの関係 ・豆太の性格 等	・主役は豆太とおさえる。 ・教科書の文書に載っている言葉を拾って書かせる。 ★簡単な相関図を書くことができたか。 【関心・意欲・態度】(ノート)

【児童の反応より】

短時間での相関図は、難しかった児童も多い。相関図を通して読みの学習ができることがわかった。ここでは、大まかなあらすじだけとらえて次時につなげた。

2時間目

【ねらい】 宝箱作りを通して、場面の移り変わりに注意しながら、豆太の性格や気持ちの変化を叙述を基に想像して読むことができる。

学習内容	指導の手立て ★評価
① 最初の豆太の挿絵を見て、この時の豆太はどんな豆太か考える。  おくびょう豆太 弱虫豆太 ② 夜中一人で走っている場面の挿絵を見て、この時も①の豆太かを考える。 ちがうよ！ 勇気があるよ！  ③ 豆太が話を通してどのように変化しているのかを、4つの場面を選びその時の豆太がわかるように書いて、宝箱の側面に貼る。 どうして「こわがり豆太」や「安心豆太」にしたのか、根拠となる文をワークシートに書き抜く。	例  あんしんしてる豆太  こわがり豆太 ★場面の移り変わりに注意しながら、豆太の性格や気持ちの変化を叙述を基に想像して読むことができたか。 【読む】（宝箱・ワークシート）

【児童の反応より】

根拠を書かせることで、教科書の文を基に考えられる児童が多かった。しかし、挿絵で判断をし、根拠となる文章が後付けになる児童もいた。

3時間目

【ねらい】対話を通して、自分の考えを整理したり、深めたりする。また、語彙を豊かにすることができる。

学習内容	指導の手立て ★評価
① ペアで対話をする。(約20分) 宝箱をくるくる回し場面のつながりを意識しながら、場面ごとの豆太を紹介し合う。  どうしてこれにしたのですか? 一人でせっちんに行けないから おくびょう豆太にしました。	・同じ場面でも人によって豆太の捉え方が違う、同じ「臆病豆太」でも根拠にした文が違うので、その違いに気付けるとよい。 ・気になったところを質問していけるとよい。 ★自分の考えを整理したり、深めたりすることができたか。 【読む】(対話の様子)(宝箱)
② 全体で共有タイム。 それぞれの場面で、どんな豆太なのかを聞き合う。 根拠となる文を確認する。	・終わったら、ペアを替えて繰り返し行う。 ・対話の時間は十分に確保する。 ・児童が読み取れていないところは、その部分の本文を音読させ、読みを深める。 「勇気のある豆太」「勇敢」「勇ましい」 など、似た言葉を出させたら板書をし、語彙を豊かにする。

【児童の反応より】

友だちと同じまたは、違いを見つけることを楽しむ児童が見られた。ペアを替えて何度も対話をすることで、やり方にも慣れ、話す内容や質問が変わり、自分の思考を深めているように感じた。よって対話は十分な時間を確保することも重要である。

ワークシートなしで、対話をする方が、思考が活性化するのもかもしれない。ワークシートがあると、最初の考えに囚われてしまう児童もいると考える。

全体での共有タイムは大切だと感じた。全体で共有することで、新しい情報が入る。「勇気」「勇敢」など似たような言葉がどんどん出てきて、児童の語彙が豊かになっていくのがわかった。次期指導要領で示されている語彙を豊かにすることにつながった。

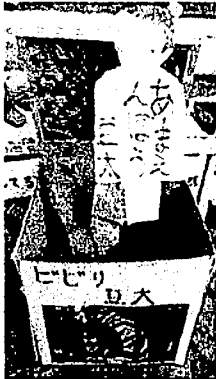
また、根拠となる文を確認することを通し、ペアでの対話では気づかなかった読みを獲得する

こともできた。全場面を通して確認したことで、場面の移り変わりを意識して学習できたと思う。

この時間の児童は、「頭フル回転した!」「国語楽しい!」「発表できた!」ととても良い表情だった。

4時間目

【ねらい】豆太を一言で表すとどんな豆太なのかを考える活動を通して、場面と場面を関係づけて読むことができる。

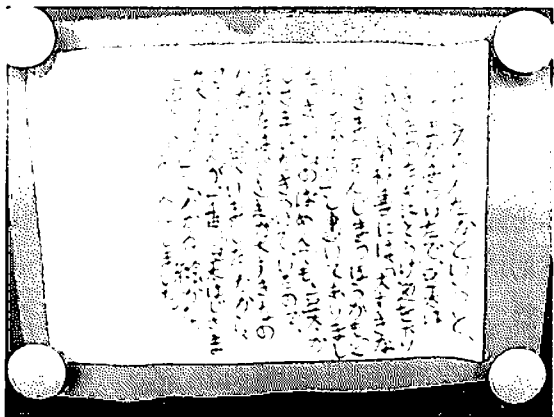
学習内容	指導の手立て ★評価
① 豆太を一言で表すとどんな豆太か考えて、宝箱の中の「飛び出す豆太」に書く。 ※そう考えた理由を言えるようにしておく。  ② ペアで対話をして、いろいろな考えを知る。 ③ 全体で共有タイム。 前に並べてみる。 ↓ 似たような言葉は近くに置く。	★豆太を一言で表すとどんな豆太なのかを考える活動を通して、場面と場面を関係づけて読むことができる。 【読む】(宝箱作り) ・根拠をしっかりと伝えさせる。 (理由は、一人でせっちんに行けない臆病豆太は、じさまに甘えているということだから。など) ・「甘えん坊豆太」の近くには、「臆病豆太」を置く。

【児童の反応より】

一言で表すことにより、場面と場面を関係づけて読むことができたのかもしれない。

5. 6時間目

【ねらい】 お気に入りの場面を紹介する活動を通して、互いの感じ方や考え方の違いに気付くことができる。

学習内容	指導の手立て ★評価
① お気に入りの場面を、巻き物に書く。 挿絵を中ぶたに貼る。  ② ペアで紹介し合う。(対話) ・ 宝箱を交換し合い、相手の巻き物を音読する。 ・ 面白いな、ステキだなと思ったところを伝え合う。 ③ クラスで共有タイム ・ 特に「いいなあ」と思った友だちを発表する。 ・ 何人かみんなに発表する。 ④ ふりかえり ・ 今日の学習を振り返って思ったことや気づいたことを伝え合う→ワークシート	・ 場面を振り返る。 ★お気に入りの場面とその理由を書くことができる。 【読む】(巻き物) ・ 友だちとの考え方のちがいを見つけてくるように伝える。 ・ 終わったら、色々な児童と紹介し合えるようにする。 ★互いの感じ方や考え方の違いに気付くことができたか。 【読む】(ワークシート)  

【児童の反応より】

友だちの宝箱を自分で開けることが、とてもワクワクしたようだ。一方で、友だちが考えたものに意見をすることが難しかったようである。見る視点を具体的に挙げる必要があったかもしれない。または、活動がマンネリ化してしまったように感じる。

5. 成果と課題

【成果】

- 身につけさせたい力に沿った言語活動を設定できたと思う。宝箱を作ることを通して、ある程度目的意識を持って読むことはできた。国語に苦手意識のある児童も、宝箱を作ることを通しての学習だったため、楽しみながらできたようだ。
- 考えを交流したり、共有したりすることや、新たな気づきを得たことが楽しかったと感じている児童もいた。
- 対話活動を取り入れることで、児童の思考が深まっていたように感じる。また、ペアでの対話活動は、一対一なので全員が活躍することができる。自分の意見を聞いてもらえた満足感は大きいと考える。
- ペアでの対話活動のあとに、全体での共有タイムを設けることで、気づかなかったことに気づくことができた。全体であっても、児童が主体的に話せるように児童の思考の流れを大事にし、児童の言葉をつないでいくことが大切だと感じた。

【課題】

- 宝箱を作るという活動は、児童にとって楽しかったようであるが、単なる活動になってしまいう児童もいる。文章を根拠にして対話をする中で、「やっぱりこうなのでは」と必死になって考える時間はあまりなかった。本当に読む力がついているのか、次の単元で試してみたいと思う。
- 対話活動が毎回同じパターンであったので、児童にとって新鮮ではなくなってしまった。しかしそれ以上に、「なんのために今対話をしているか」が児童にわかりにくかっただろう。
- 研究仮説にあるように、目的意識を持たせ、対話を効果的に取り入れることができれば、おそらく読む力はつくと考えられる。日々の授業の小さな「できた」「わかった」の積み重ねが、大きな力になり、児童の自信につながるだろう。児童に力をつけることができるように、今後も授業を模索していきたい。